

⑤ 共通観点 3 (大学独自の成果指標と達成目標) 概念図【1ページ】

トランスボーダー大学へ:独自の達成指標

(10年後)

(独自の成果指標と到達目標)

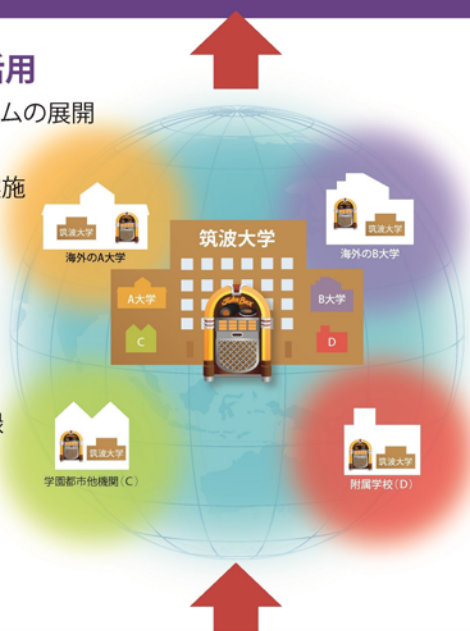
- キャンパス・イン・キャンパスの数：**13校**
- 科目ジュークボックスの外国語による授業科目数：~~500科目~~ **1,000科目**
- 科目ジュークボックスの学位取得可能なコースの数：**12コース**
- 外国人研究者等の受け入れ数：**2,000人**
- 外国人留学生の正規生の数：**2,000人**
- 日本に就職した外国人学生の数：**300人**
- チューニングの進捗：**100%**

Campus-in-Campusの活用

- 他機関と連携した学位プログラムの展開
- 教育連携と単位互換
- 相互研究指導・学生支援等の実施
- ショートプログラムの拡充
- 学生と教職員の相互交流

科目ジュークボックスシステムの活用

- 授業科目のオンライン履修登録
- 授業の予習復習(eラーニング)
- オンデマンド授業の視聴



(大学改革の取組)

① 研究力強化



② 教育力強化



③ マネジメント改革



(現 状)

(独自の成果指標と到達目標)

- キャンパス・イン・キャンパスの数：**0校**
- 科目ジュークボックスの外国語による授業科目数：**0科目**
- 科目ジュークボックスの学位取得可能なコースの数：**0コース**
- 外国人研究者等の受け入れ数：**1,166人**
- 外国人留学生の正規生の数：**1,427人**
- 日本に就職した外国人学生の数：**102人**
- チューニングの進捗：**0%**

共通観点 1 創造性、展開性等【4 ページ以内】

- 構想・ビジョンが、各大学の理念等と整合し、かつ戦略性、創造性、展開性及び実現可能性を有したものとなっているか。タイプに合った革新性、先見性及び先進性ある構想となっているか。また、取組が概ね全学的なものであり、大学全体の底上げが認められる内容となっているか。

【大学の理念】

筑波大学は建学の理念において、「国内的にも国際的にも開かれた大学」を基本的性格とし、国内外の教育・研究機関および社会との交流関係・学際的な協力のもとで教育・研究を行い、創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材を育成し、学術文化の進展に寄与することを大学の目的としている。

この目的の実現のために本学は「変動する現代社会に不断に対応しつつ、国際性豊かにして、かつ、多様性と柔軟性を持った新しい教育・研究の機能および運営の組織を開発」し、「これらの諸活動を実施する責任ある管理体制を確立する」ことを謳っている。

グローバル化の加速により人類が直面する課題が複雑化し、地球規模に拡大する現代社会において、本学は建学の理念を踏まえ、地球規模課題の解決に向けた知の創造とこれを牽引するグローバル人材の育成をミッションとし、地球規模課題の解決に貢献する大学たることを目指している。その中で大学の国際化にあたっては、「国際性の日常化」をキーワードとして、学生と教職員が国際活動を特別なものとして意識せず、世界の一員であることを日常的に実感する大学環境の具現化を目指している。

【本構想の目的】

本構想は教育研究のトランスボーダー化を加速する地球規模の教育研究環境整備（Campus-in-Campus）を核に、高い研究力を背景とした国際的互換性と国際就業力を担保する革新的な教育プログラムの実施、国際的に存在感のある大学とするためのマネジメント体制の改革、大学構成員の意識変革を含む大学の包括的国際化を推し進め、地球規模課題の解決に向けた知の創造とこれを牽引するグローバル人材の育成を加速し、地球規模課題の解決に貢献する大学として、建学の理念にある「開かれた大学」から「我が国の高等教育と社会を世界に開き、率先して世界の未来を拓く大学」への跳躍を成し遂げることを目的とする。

【本構想における取組概要】

本構想は筑波大学がその理念を達成するために設定している3つの基本的な観点、①基礎科学研究と社会還元型研究の強化、②高い研究力を基盤とした国際的互換性と国際就業力を担保する教育システムの構築、③これらの研究、教育を可能とする大学マネジメント体制の改革をグローバル基準で加速するものである。各事項の進捗状況は以下のとおりである。

- ① **研究の強化**：支援すべき研究、および研究グループの選択と高度組織化による集中的な支援を進めている。研究組織の高度化のために開学以来変更のなかった学則の改定も行った。
- ② **教育システムの構築**：国際的な通用性からさらに一歩進んだ概念として国際的な互換性を持つことのできる「学位プログラム」制への全面的な移行の途上にある。その推進に向けて学生が所属する教育組織（研究科や学群）と教員が所属する教員組織（系）の分離を終え、ディシプリンを超えた教員の活用が可能な体制となっている。
- ③ **マネジメント体制の改革**：学校教育法の観点からは、学内資源（人事、予算、施設など）の配分などに関して学長のリーダーシップが発揮できる体制を構築し、国立大学法人法の観点からは、法人化によるメリットを具現化するための施策を進めている。

これらの戦略的かつ本学独自の準備のもと、本構想では①、②を加速するために必須である「国、機関、学内組織（たとえば、産官学）などの境界を超え、積極的に学内外の教育研究資源を活用する」戦略、すなわち教育研究のトランスボーダー化を推進する。その核は、学外に本学のキャンパスを創成し、学内に学外組織のキャンパスを創成する取組（Campus-in-Campus）である。

1. 教育研究のトランスボーダー化を促進する Campus-in-Campus

本構想の核である Campus-in-Campus とは、本学と海外の協定校、および本学と連携する産官学拠点のキャンパスを丸ごと仮想的に相互にキャンパス内に取込み、その中で本学とパートナー大学の学生、教員、研究者、職員が活動する研究教育環境（学修支援のみならず教職員等の雇用などの

組織に固有の制限なども含めて)を双方向にシームレスに共有し、協働するためのプラットフォームとする考え方であり、実体である。これは、従前の海外分校、交換留学、eラーニングや出張講義による授業共有にとどまらず、実体的な環境下で常時、持続的かつ全学規模にわたる海外パートナー大学との協働の場を展開するジョイントベンチャー型の取組である。具体的には下記4つの施策の実施により Campus-in-Campus を実現する。

- (1) 科目ジュークボックスシステムによる海外パートナー大学との協働教育の展開
- (2) 本学と海外パートナー大学の教育研究ユニット相互共有による世界トップレベルの教育研究の実現
- (3) パートナー大学以外の海外協定校、海外拠点、筑波研究学園都市の機関、附属学校等を活用したトランスボーダーな教育研究を展開する場の構築
- (4) 大学間の壁を超えた教職員の国際協働を促進し、国際感覚を涵養するための本学と海外大学とのジョイント・アポイントメント、エフォート管理システムの導入

(1) **科目ジュークボックスシステム**：本学および海外の各パートナー大学が、それぞれの在学ならびにパートナー大学の学生が履修可能な授業を指定し、「ジュークボックス」のように共通のナンバリングに基づいて科目一覧・シラバスに掲載し、いずれの大学から提供された科目も自分の大学の科目として学生が履修できるシステムである。成績評価および単位認定は、科目提供側から示された成績評価をもとに、その学生が本来所属する各大学において行う。本システムにおける科目は、教員・学生の大学間ローテーションによるライブ授業、地球規模課題の現場におけるオンサイト実習、インターネットを利用した遠隔教育を組み合わせを行い、これまでの ICT とライブの複合型協働教育プログラム(がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン、国際交渉力強化プログラム)実施の実績とノウハウを活用して教材の開発・運用および履修管理を行う。

(2) **本学と海外大学の教育研究ユニット相互共有**：世界トップレベルの教育研究を行っている海外の教育・研究ユニット(研究室・研究チーム)をユニットごと招致し、共同研究の実施ならびに本学学生の研究指導を行う。海外研究機関に勤める著名研究者を PI(責任指導教員)として本学でも雇用し(ジョイント・アポイントメント)、副 PI は任期付き助教/准教授として本学に常駐する。H26 年度は人文社会分野 1 ユニット、医学医療分野 2 ユニットの計 3 ユニットの招致が決定しており、さらに順次招致を進める。また、スポーツ科学等の本学が強みを持つ分野においては、協定校に教育研究ユニットの分所を設置し、双方向の協働を促す。これらの教育研究ユニットも科目ジュークボックスに組み込み、最先端の研究に触れ、指導を受ける機会を学生に提供する。

(3) **トランスボーダーな教育研究の展開の場の構築**：海外においては本学が有する海外拠点、欧州(ドイツ、フランス)、東南アジア(ベトナム、インドネシア、マレーシア)、中国、北アフリカ(チュニジア)、中央アジア(ウズベキスタン、カザフスタン)および海外協定校(H26.5.1 現在 60 カ国・地域および国際連合大学と計 261 協定)を活用することにより、Campus-in-Campus の支援とパートナー大学の拡充を図る。海外パートナー大学については、すでに合意形成がなされているボルドー大学、カリフォルニア大学アーバイン校、国立台湾大学から運用を開始し、協議中のエジンバラ大学、グルノーブル大学、マレーシア工科大学、ラフバラ大学がこれに続く。

国内においては、本学に加え、連携する筑波研究学園都市の機関や企業も Campus-in-Campus の場とし、研究学園都市全体を巻き込んで展開する。これにより街全体の「国際性の日常化」を推進する。このほか、国際共同研究の促進および国際的レピュテーションの向上を目的として、世界中の研究者を集めて例年秋に開催している Tsukuba Global Science Week (TGSW) をオールジャパンの体制で開催する「筑波会議」に発展させ、レピュテーションの一層の向上を目指す。また、附属学校ならびに研究学園都市内のスーパーグローバルハイスクール(SGH)、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定校にも科目ジュークボックスを一部開放し、中等教育の国際化・高度化に寄与するとともに、高大連携による教育プログラム実施の基盤として活用する。

(4) **教職員の流動性の向上**：Campus-in-Campus の実現にあたっては、大学の壁を超えた教職員の活動が円滑に進められるよう、海外パートナー大学と本学を兼務する教職員については、両大学でジョイント・アポイントメントを実施し、各大学におけるエフォート按分をもとにした混合給与制(年俸制)を適用する。

また、本構想の中核をなす「Campus-in-Campus (CiC)」の考え方を、教養教育や専門分野におい

て相補的な連携を行う国内大学等に当てはめたものを「Campus-with-Campus (CwC)」と呼び、この趣旨に賛同する国内大学等とともに更なる大学改革と国際化を推進する。

2. 本構想の革新性と大学の国際性および世界的存在感の向上に与えるインパクト

学生：Campus-in-Campus と科目ジュークボックスの実現により、①教育コンテンツの多様性、国際性が飛躍的に向上し、海外留学を前提とした単位互換型・ジョイント学位型の共同学位プログラム等、人材育成目的にあった国際協働教育プログラム編成・実施の自由度が大幅に増大するとともに、地球規模課題の現場での課題解決型学修（Project Based Learning）を教育プログラムに組込むことが容易になる。

②より多種多様な授業を、一つの大学に在籍するだけで履修することが可能になり、国際性かつ学際性に富んだ授業経験を効果的に積むことを通して、グローバルかつ広範囲な視点から多角的に物事を分析する能力を獲得することができる。同時に、本学と海外協定校間で相互の学生の流動性が増し、海外留学する機会が大幅に拡大することによって、自発的な企画・提案に基づいた異文化の中での生活・他者とのふれあい・学修を通じた自己成長（「武者修行型学修」）も促進される。

教員：Campus-in-Campus における高い人材流動性から多大な恩恵を受ける。海外で継続的に実践的な教育経験を積むことができるため、国際的互換性のある教育力を養うことができる。さらに、海外研究者との協働教育研究の機会の拡大を通して研究者としての創造性や柔軟性を高めることができ、結果的にこれが研究力の向上と新たな研究の展開につながる。

職員：Campus-in-Campus での研修と日常的な国際業務の中で、グローバルなアドミニストレーションの必要性を理解し、海外大学と協働で業務の遂行と問題解決に当たることを学び、自己変革と組織改革を率先して行う意識を高めることができる。

こうした大学構成員の意識改革と自己成長に加え、大学全体としても、Campus-in-Campus における協働のダイナミズムの中で多様な専門領域から生まれる「知の統合」と、柔軟な発想と価値観の転換に基づく新しい領域の創造と発展を引き起こし、大学全体の研究ポテンシャルを飛躍的に向上させるとともに、大学の研究力と教育力の相乗的な向上の正のスパイラルによる持続的な大学の地力の強化を実現し、地球規模課題の解決に向けた教育研究の世界トップレベルの拠点形成に結びつけ、世界的存在感を持つ「率先して世界の未来を開く大学」を実現する原動力を得ることができる。

3. グローバルイノベーション人材の育成のための具体的な教育プログラムの開拓

Campus-in-Campus による科目の選択肢の充実、特に英語で実施する科目および海外留学を前提とする科目の質と量の充実を活かして、学位プログラムを含む既存の学士・大学院課程教育の単位互換、英語化、海外留学のカリキュラムへの組込みを含む国際化、質の向上をさらに推し進めると同時に、グローバルイノベーション人材育成のための教育プログラムを展開する。併せて、多様化する人材育成ニーズに柔軟に対応するための全学的な学位プログラム化を推進する。本学の人材育成目標を明確化した「筑波スタンダード」を発展させ、各課程におけるグローバルイノベーション人材像を以下のように定義し、その育成に適した形態・内容のプログラムを展開する。なお、本構想で本学が取り組むべき「地球規模課題」としては、本学の教育研究上の実績・強み、および学際融合性を活かせる Future Earth & Space（未来の地球と宇宙）、Human Health & Wellness（人の健幸）、Global Risk & Security（地球規模のリスクと安全）、World Peace & Diversity（世界の平和と多様性）を重点課題として設定する。学士、修士、博士の各課程で養成される人材像は以下のとおりである。

学士：地球規模課題全般を俯瞰する幅広い知識と同時に特定の地球規模課題に関する深い知識を持ち、国際感覚とコミュニケーション能力を身につけ、自らのアイデンティティを熟知するとともに、社会・組織のダイバーシティに対する理解と法律・経済・経営の十分な基礎知識を併せ持ち、実務の現場で地球的視座からの合意形成を目指して議論や交渉ができる人材

修士：特定の地球規模課題の現場を熟知し、課題を発掘する能力と、その解決に向けて社会や組織の中で個人的特徴・文化・専門性等の異なる人々をまとめ、差異をイノベーションの源泉として活かし、成果を社会に還元するマネジメント力と協調性を持った人材

博士：広い俯瞰力、深い専門性、高い想像力を活かして科学だけでは完全な答えのない地球規模課題に挑み、解決に向けた取組を通じて組織・地域社会・国家・世界の未来的なあり方を

創出する統率力と変革力を有する人材

これらの人材を育成する手段として、**学士課程**においてはグローバル化した現代社会で求められるリベラルアーツ教育、課題解決型学修（PBL）、海外留学、Late specialization を基軸とし、大学院の協働型学位プログラムへの接続も可能なオールラウンド型学士学位プログラム、国内外でのPBLによって理工系分野のイノベティブな人材を育成する総合理工学学位プログラム、主に外国人学生を対象とし、高い日本語運用能力と日本社会・文化の深い理解を基盤に、芸術、体育、エイジングケア、特別支援、日本語教育、農業という本学が強みとする分野の専門性を身につけ、日本および母国で経済社会の発展に貢献する国際社会で就業力のある人材育成学士学位プログラムを展開する。

大学院課程においては、専門性および対象とする地球規模課題に応じて、**本学の重点研究センターやCampus-in-Campus 参加組織の強みを組合わせた海外大学とのジョイント型学位プログラム(グローバルイノベーション学位プログラム)**、**研究学園都市の機関や国内外の企業との協働型学位プログラム(ライフイノベーション学位プログラム)**を展開する。また、**学士課程と大学院修士課程を接続する地域研究イノベーション学位プログラム(グローバル人材育成推進事業特色型で実施中)**を基盤とし、理系分野まで拡張したグローバル・リーダー育成学際プログラムをはじめ、社会的ニーズの高い人材育成プログラムを順次展開する。

さらに、附属学校、SGH、SSH との初等・中等教育と高等教育との接続型教育プログラムの開発・実施を進め、世界を俯瞰し地球規模課題を見出す感性と目利き力、グローバル・サイエンティストの基礎となる探求心と研究意欲、研究推進能力と発信能力など、グローバルイノベーション人材となるための素地の早期涵養を行う。また、附属学校との連携による初等・中等教育に携わる教員の国際化、オリンピック教育を通じた国際理解・国際平和教育も推進する。**このほか、国立高等専門学校機構が指定した「グローバル高専(GCT)校」と本学との連絡協議会を通して、高専のグローバル化の推進に寄与するとともに、SGH と GCT と SGU の互惠的連携を図る。**

4. 「世界の未来を拓く大学」への跳躍のための学内基盤・実施体制の強化

本構想では、これまで蓄積してきた教育研究、国際化、大学ガバナンスに関する改革の実績を最大限に活用する。その代表的な組織整備状況は下記の通りである。

- ① 体育、芸術を含む幅広い分野の教育研究組織間の学際的な協働を支援する**グローバル教育院を活用した分野横断的学位プログラムの実施**
- ② 国際活動の利便性強化を目的に創生された**グローバル・コモンズ機構**による、**留学生受け入れ・学修支援、日本人学生の海外派遣支援、国際活動業務等の支援**
- ③ 学生宿舎、日本語教育システム、留学生センター、**スチューデント・コモンズ(グローバル・コモンズ機構の下位部門)**等を活用した日本人・外国人学生に対する支援

これら既存組織の持つポテンシャルを効率的かつ最大限に活用するための整備のみならず、学生・教職員の国際性をさらに向上させる目的で、本構想では学長のリーダーシップのもと、以下の基盤的な体制整備とマネジメント改革を進める。

- (1) 本構想の全学的実施を推進・支援する学内組織「**スーパーグローバル大学事業推進室**」(仮称)の整備と、グローバル教育院、**グローバル・コモンズ機構**、総合言語教育センター(仮称)、教育クラウド室等の推進・支援組織の機能強化による運営体制の強化
- (2) 教職員の**ダイバーシティ確保**のために、実施中の外国人・女性・若手教員の雇用推進(Foreign Lady Young = FLY プログラム)の拡充を含めた学長裁量人事枠の効果的活用
- (3) 事務系「**戦略人事枠**」の導入による博士学位取得者、国際業務従事経験者など国際性・専門性の高い職員の**戦略的配置**と**グローバル・コモンズ機構**による職員の国際化・高度化の教育研修とフォローアップ
- (4) 外国語センターと留学生センター日本語教育部門の機能統合(総合言語教育センター(仮称))による日本人学生、留学生の語学力向上

今年度から導入する国際バカロレア(IB)入試を皮切りにグローバル人材の素養を持つ高校生を積極的に受け入れる入試システム改革、附属学校および研究学園都市内のSGH指定校とのIB教育における連携強化

1. 国際化関連 (2) 流動性

① 日本人学生に占める留学経験者の割合【1ページ以内】

【実績及び目標設定】

各年度通年の数値を記入

	平成25年度	平成28年度	平成31年度	平成35年度
単位取得を伴う海外留学経験者数 (A)	443 人	650 人	1,200 人	2,000 人
うち学部 (B)	238 人	300 人	400 人	500 人
うち大学院 (C)	205 人	350 人	800 人	1,500 人
全学生数 (D)	15,053 人	14,559 人	14,079 人	13,439 人
うち学部 (E)	9,646 人	9,263 人	8,958 人	8,551 人
うち大学院 (F)	5,407 人	5,296 人	5,121 人	4,888 人
割合 (A/D)	2.9 %	4.5 %	8.5 %	14.9 %
割合 (B/E)	2.5 %	3.2 %	4.5 %	5.8 %
割合 (C/F)	3.8 %	6.6 %	15.6 %	30.7 %
3ヶ月以上研究派遣された大学院生数 (G)	73 人	100 人	150 200 人	300 人
割合 (G/F)	1.4 %	1.9 %	2.9 3.9 %	6.1 %

【これまでの取組】

本学は、「国際的に開かれた大学」であることを建学の理念とし、「日本人学生の海外派遣を着実に増加させる。(第二期中期計画)」を掲げ、これまで以下の取組を行ってきた。

1) 海外大学との交流協定を拡大し、学生交流を促進(協定校数：H26年度で261校)

- ・交換留学等(単位互換(特別聴講学生等)、特別研究学生等)の実施
- ・海外大学とのデュアルディグリープログラムの実施

2) 特別プログラムの実施

大学院共通科目(海外インターンシップほか)、世界展開力強化事業の採択(H23、H25)に伴う海外協定校との学生交流の促進、グローバル人材育成推進事業の採択(H24)に伴う海外留学を組み込んだ学士・修士一体の地域研究イノベーション学位プログラムを開設、その他(海外留学を組み込んだ各種教育プログラム)の開設

3) 海外大学との交流協定を拡大し、学生交流を促進(協定校数：H26年5月1日現在で261校)

こうした取組を行うことにより、日本人学生の海外派遣数は年々増加している。

(日本人学生の単位取得を伴う海外留学者数：H25年度 443人)

【本構想における取組】

今後は、建学の理念等に基づくこれまでの取組を継続的に行っていくとともに、以下の取組を行うことにより、日本人学生の海外留学の更なる拡大を図る。

1) 大学院学生の海外研究室ローテーション等の仕組みを充実させ推奨する。(Campus-in-Campus等活用)(博士全員、修士1/2)

2) 海外留学を伴う学位プログラムの創設・拡大(55人)

- ・ライフイノベーション大学院学位プログラム(企業、研究機関との協働)(H28受入開始)
- ・グローバルイノベーション大学院学位プログラム(海外大学との共同)(6分野)(H28〃)
- ・IB指導力育成大学院学位プログラム(H29〃)
- ・スポーツアカデミー拠点形成に伴う大学院学位プログラム(H28〃)
- ・オールラウンド型学士学位プログラム(H28〃)
- ・グローバル・リーダー育成学際プログラム(仮称)(2分野)(学士・修士)(H28〃)

3) グローバル科目群の履修推奨(学士課程の海外留学科目)

- ・海外短期留学をグローバル科目として認定する仕組みを整備する。

4) 短期留学の飛躍的拡大

- ・科目ジュークボックスシステムを活用した海外協定校との学生交流拡大
- ・Tsukuba Study Abroad Program(グローバル人材育成推進事業で開始)の活用 他

こうした取組を行うことにより、H35年度には日本人学生の海外留学者数を現在の4倍以上にまで拡大させる。(日本人学生の海外留学数：H25年度 443人 → H35年度 2,000人)

1. 国際化関連 (2) 流動性

② 大学間協定に基づく交流数【1 ページ以内】

【実績及び目標設定】

各年度通年の数値を記入

	平成25年度	平成28年度	平成31年度	平成35年度
大学間協定に基づく派遣日本人学生数 (A)	467 人	700 人	1,300 人	2,100 人
うち単位取得を伴う学部生数	211 人	270 人	360 人	450 人
うち単位取得を伴わない学部生数	166 人	200 人	200 人	200 人
うち単位取得を伴う大学院生数	57 人	180 人	640 人	1,200 人
うち単位取得を伴わない大学院生数	33 人	50 人	100 人	250 人
全学生数 (B)	17,081 人	17,081 人	17,081 人	17,081 人
割合 (A/B)	2.7 %	4.1 %	7.6 %	12.3 %
大学間協定に基づく受入外国人留学生数 (C)	342 人	520 人	720 970 人	940 1,500 人
うち単位取得を伴う学部生数	214 人	320 人	440 600 人	580 970 人
うち単位取得を伴わない学部生数	0 人	0 人	0 人	0 人
うち単位取得を伴う大学院生数	85 人	130 人	100 240 人	120 380 人
うち単位取得を伴わない大学院生数	43 人	70 人	180 130 人	240 150 人
全学生数 (D)	17,081 人	17,081 人	17,081 人	17,081 人
割合 (C/D)	2.0 %	3.0 %	4.2 5.7 %	5.5 8.8 %

【これまでの取組】

本学は「国際的に開かれた大学として、国内外の教育・研究機関との緊密な交流関係を深める」との建学の理念のもと、「留学生交流と研究者交流の拡大により国際的な人材交流を推進（第二期中期計画）」を掲げ、海外大学との教育・研究交流を積極的に行ってきた。

1) 国際的な人材交流の推進のため 60 か国・地域の大学と 261 の協定を締結し、学生の相互交流を行っている。(協定数は、H16 年度の 29 か国・地域/105 協定と比べると、約 2.5 倍の増) (H26 年 5 月現在)

2) 地域別学生の派遣・受入実績 (H25 年度実績)

派遣：欧州 74 人、北米 93 人、大洋州 64 人、アジア 184 人、南米 49 人、中東 3 人

受入：欧州 74 人、北米 13 人、大洋州 3 人、アジア 166 人、南米 14 人、CIS (旧ソ連) 49 人、中東 3 人、アフリカ 19 人、無国籍 1 人

【本構想における取組】

今後も、建学の理念等に基づくこれまでの取組を継続的に行っていくとともに、「交流協定の実質化」「地域バランスと双方向交流の強化」(国際化戦略基本方針)を踏まえ、以下の取組を行う。

1) Campus-in-Campus のパートナー大学と科目ジュークボックスシステムを活用した双方向学生交流を推進

- ・単位互換等による授業科目、ジョイントディグリー等の共同教育プログラムの履修
- ・短期プログラムの履修、語学研修

2) Campus-in-Campus の高度な活用

- ・日本人学生が、海外で本学の授業科目を履修 (休学・留年等の留学のデメリットを解消)
- ・外国人留学生が、出身大学の授業を本学で履修
- ・外国人留学生が、海外教育研究ユニットの提供する質の高い授業を履修

1. 国際化関連 (5) 教務システムの国際通用性

① シラバスの英語化の状況・割合【1ページ以内】

【実績及び目標設定】

各年度5月1日の数値を記入

	平成25年度	平成28年度	平成31年度	平成35年度
シラバスを英語化している授業科目数(A)	1,928 科目	3,100 科目	4,800 科目 3,440	5,500 科目 3,880
うち学部(B)	532 科目	500 科目	1,200 科目 550	1,500 科目 620
うち大学院(C)	1,396 科目	2,600 科目	3,600 科目 2,890	4,000 科目 3,260
全授業科目数(D)	15,673 科目	15,673 科目	15,673 科目	15,673 科目
うち学部(E)	7,802 科目	7,802 科目	7,802 科目	7,802 科目
うち大学院(F)	7,871 科目	7,871 科目	7,871 科目	7,871 科目
割合(A/D)	12.3 %	19.8 %	30.6 % 21.9	35.1 % 24.8
割合(B/E)	6.8 %	6.4 %	15.4 % 7.0	19.2 % 7.9
割合(C/F)	17.7 %	33.0 %	45.7 % 36.7	50.8 % 41.4

【これまでの取組】

本学では、全ての授業科目のシラバスを作成することを目的として、「シラバス作成ガイドライン(H20年度)」を策定し、全ての教育組織でシラバスを作成している。

1) 単位制度の実質化・厳格な成績評価の実施のために、シラバス作成ガイドラインでは、全学的に共通事項として以下の項目を挙げている。

- ・科目の基本情報(科目番号、授業科目名、授業形態、標準履修年次、開設学期・曜時限・教室、単位数)
- ・担当教員等(教員名、TF(ティーチングフェロー)、ティーチングアシスタント、オフィスアワー等)
- ・受講によって得られる知識・能力等(教育目標との関連、授業の到達目標)
- ・授業内容等(授業概要、キーワード、授業計画、履修条件)
- ・成績評価方法
- ・受講にあたって(教材・参考文献・配付資料等、授業外における学習方法、受講生に望むこと)

2) 英語で実施している全ての授業科目においては、原則として英語でシラバスを作成

3) 電子化の状況は、教育情報システム(TWINS)(学籍や授業科目・成績等のデータを管理するシステム)の更新に伴い、授業科目情報システム(KdB)を構築し、授業科目の情報を電子化・蓄積を行っている。

4) シラバスの電子化を推進し、HPでの情報公開を充実した。

※H25→H28の数値の伸びが大きいのは、新規開設の英語授業科目のシラバスを作成することによると考えられる。

【本構想における取組】

今後ともいままでの取組を継続的に行うとともに、学位プログラム制への移行、チューニングの仕組み作り、科目ナンバリングの仕組みの再整備を行い、以下の取組を行いながらシラバスの英語化を拡大する。

1) 開設する次の学位プログラムは英語でシラバスを作成する。

- ・オールラウンド型学士学位プログラムおよび総合理工学プログラム(学士課程)
- ・グローバルイノベーション共同学位(ジョイントディグリー)プログラム、ライフイノベーション学位プログラム(大学院課程)

2) 科目ジュークボックスシステムを経由して海外大学との単位互換を行う授業科目は、全て英語でシラバスを作成する。

2. ガバナンス改革関連 (1) 人事システム				
① テニユアトラック制の導入【1ページ以内】				
【実績及び目標設定】		各年度通年の数値を記入		
	平成25年度	平成28年度	平成31年度	平成35年度
テニユアトラック対象者数 (A)	78 64 人	78 64 人	78 64 人	78 64 人
年間専任教員採用者数 (B)	183 118 人	183 118 人	183 118 人	183 118 人
割合 (A/B)	42.6 54.2 %	42.6 54.2 %	42.6 54.2 %	42.6 54.2 %
【これまでの取組】				
<p>本学では、第二期中期計画において、柔軟で多様な人事制度の構築と優れた教職員の確保・育成に関する具体的方策として、「定期的な教員業績評価とテニユアトラック制度などを整備・運用し教員の質の向上を図る」ことを目標に掲げ、これまで以下の取組を行ってきた。</p>				
1) 教員業績評価とテニユアトラック制度の整備・運用				
<p>若手大学教員の能力および資質の向上を目的として、H19年4月から「大学教員のテニユアトラック制に関する規程」を制定し、原則として新たに採用する助教の職に適用している。</p>				
2) 「若手研究者の自律的研究環境整備促進」事業				
<p>文部科学省科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」事業の採択を受け、「次代を担う若手大学人育成イニシアティブ」によるテニユアトラック事業 (H19～23年度) を展開し、研究補助者、スタートアップ支援、研究費や独立スペース等の重点支援を行った。</p> <p>振興調整費の支援が終了したH24年度からは、大学の自主財源で後継プログラムを展開している。</p>				
3) 制度の見直し				
<p>H25年11月からテニユアトラック制に関する規定を改正し、テニユアトラック制のうち、本学との雇用関係の下で、原則として2年以上海外の研究機関へ派遣する国際テニユアトラック制を創設した。国際テニユアトラック教員は、本学のメンター教員と海外のメンター教員との連携のもとに国際共同研究を行い、一流の学術雑誌に国際共著論文を発表することがテニユア獲得条件の一つとなっている。</p> <p>さらにH26年1月から就業規則を改正し、国際テニユアトラック制を含むすべてのテニユアトラック制助教について年俸制を適用し、外国人を含めた優秀な若手教員確保に努めている。</p>				
【本構想における取組】				
<p>今後は、中期計画等に基づき、上記取組を継続的に行っていくとともに、テニユアトラック制の更なる拡大を図っていくため、以下の取組を行う。</p>				
1) 国際テニユアトラック制による雇用促進				
<p>教育・研究の国際的通用性および国際的評価の向上の観点から、国際テニユアトラック制による雇用を促進し、外国人教員の積極的な採用や、海外での教育研究歴を有する優秀な教員の確保を図る。なお、国際テニユアトラック制を含むすべてのテニユアトラック制助教について国際公募を推進するとともに、年俸額の明示等の労働条件の明確化を図り、優秀な外国人教員等の採用に資する。</p>				
2) ポイント制の導入				
<p>教員枠をポイントに換算し、ポイントで管理することにより、職階を自由に配置することができるポイント制を新たに導入し、長期的な財政基盤計画に基づく人事計画を策定したうえで、ポイント制を活用したテニユアトラック制助教枠の確保を行う。</p>				

共通観点 3 大学独自の成果指標と達成目標【3 ページ以内】

○ 意欲的かつ挑戦的な独自の定量・定性的成果指標と達成目標が、各大学の構想に応じて設定されているか。

【実績及び目標設定】

<定量的>

各年度大学が定める時点又は通年の数値を記入

	平成25年度 (通年)	平成28年度 (通年)	平成31年度 (通年)	平成35年度 (通年)
(指標1) Campus-in-Campus の数	0 (校)	5 (校)	8 (校)	13 (校)
(指標2) 科目ジュークボッ クスの学位取得コース数	0 (コース)	6 (コース)	10 (コース)	12 (コース)
(指標3) 科目ジュークボッ クスの科目数	0 (科目)	100 (科目)	700 200 (科目)	1,000 500 (科目)
(指標4) 外国人研究者受け 入れ数	*1,166 (人)	1,600 (人)	1,800 (人)	2,000 (人)
(指標5) 外国人留学生の正 規生の人数	1,427 (人)	1,550 (人)	1,800 (人)	2,000 (人)
(指標6) 外国人留学生の就 職者数	87 (人)	100 (人)	200 (人)	300 (人)
(指標7) チューニングの進 捗	0.0 (%)	5.0 (%)	50.0 (%)	100.0 (%)

*H24 年度の数字

<定性的>

本学は国際化拠点整備事業 (G30)、グローバル人材育成推進事業 (特色型)、大学の世界展開力強化事業等、大学の国際化を推進する外部資金に採択された実績を有するが、大学全体が包括的に国際化したとは言い難かった。そこで、グローバル教育院を学内教育特区、重点研究センターを学内研究特区、グローバル・コモンズ機構を学内管理運営特区と位置づけ、10年後の将来像を大胆に描き (Plan)、障壁となる規制を特区内で限定緩和するなどして先行実施し (Do)、その効果を内部と外部の両面から徹底的に検証し (Check)、問題点を修正しつつ、成功事例を全学へと波及させることにより、大学全体を変革 (Action) していくことが求められている。この PDCA サイクルにより、Comprehensive Internationalization「包括的国際化」(CI) の達成を目指し、これを定性的指標とする。CI はキャンパスの一角、一部の教育プログラムや研究プロジェクトだけを国際化するのではなく、大学の全てのミッション (教育・研究・社会貢献)、全学生と全ての専門分野、全教職員を国際化することにより、組織のエトス、ビジョン、価値観を変革する戦略である。

【これまでの取組】

本構想においては、その核となる Campus-in-Campus と科目ジュークボックスシステムの実施状況を表す成果指標として、①Campus-in-Campus の開設数、②科目ジュークボックスシステムを利用した学位取得可能なコースの開設数、③科目ジュークボックスシステムにおいて開講する科目数を設定する。また、Campus-in-Campus における流動性のベンチマークとして④外国人研究者の受入数を加え、学位プログラム化の推進による留学生受け入れのインパクトとして⑤外国人留学生の正規生の数、留学生を対象とした本学の特徴的な学位プログラム (国際社会で就業力のある人材育成学士学位プログラム等) による学生の就業力の向上を測る指標として、⑥日本で就職した外国人学生数、教育の国際的互換性の保証に向けた取組の指標として⑦チューニングの進捗を独自の定量的成果指標として設定する。

Campus-in-Campus の開設

Campus-in-Campus の実現に当たって、以下に挙げる 7 大学を第 1 期 (H26-30 年度) パートナー大学とし、以下の手順で開設準備を進めている。これまでの各パートナー大学との準備の進捗状況は以下の通りである。

- 1) ボルドー大学 (UB) : 同大学内に本学オフィスを設置 (H25.11)、派遣する教員候補を内定
- 2) カリフォルニア大学アーバイン校 (UCI) : 同大学内に本学オフィスを設置 (H26.5)、派遣する教員候補を内定、UCI から本学に派遣する職員を H26 年度中に受入れ
- 3) 国立台湾大学 (NTU) : NTU に本学オフィスを設置 (H26.5)、派遣する教員候補を内定
- 4) マレーシア工科大学 (MJIIT) : 同大学内に本学オフィスを設置 (H25.12)、教員を派遣
- 5) ラフバラ大学 (LU)、グルノーブル大学 (UG)、エジンバラ大学 (EU) : Campus-in-Campus 開設、研究教育に関する具体的な協働について協議・調整中

科目ジュークボックスを利用した学位取得可能なコース設置

これまで進めてきたパートナー大学との共同研究の分野を中心に、デュアル・ディグリー学位プログラムの開設について検討を行っている。これまでの進捗状況は以下の通りである。

(大学名 : 筑波大学) (申請区分 : タイプ A)

- 1) ボルドー大学 (UB) : フードセキュリティ科学分野を中心とした修士課程デュアルディグリープログラムを H26 年度から開設
- 2) カリフォルニア大学アーバイン校 (UCI) : UCI で開講されている Systems Biology 学位プログラムと本学ヒューマンバイオロジー学位プログラムとの間で修士課程デュアルディグリープログラムの開設を協議中
- 3) 国立台湾大学 (NTU) : 医学・農学分野を中心として修士課程デュアルディグリープログラムの開設を協議中

科目ジュークボックスシステムにおける科目の開設

科目ジュークボックスシステムについては、これまでに ICT とライブの複合型協働教育プログラム (がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン、国際交渉力強化プログラム) の実施による実績とノウハウの蓄積を基に基本設計を進めている。現在、第 1 期パートナー大学 7 校と、これまで進めてきた共同研究の分野を中心としたカリキュラムのすり合わせ、提供可能な授業科目の精査をパートナー大学内の本学オフィスを介して進めている。

外国人研究者受け入れ数の増加

平成 24 年度の本学の受け入れ研究者数 (短期と中・長期を合わせた総数) は 1,166 人で、全国第 6 位であった (文部科学省「国際研究交流の概況」による)。

本学は共同研究による外国人研究者の受け入れに加え、毎年 Tsukuba Global Science Week を開催し、海外から多くの研究者を招へいしている。これ以外に欧州事務所を中心とした海外拠点を通して、外国人研究者の受け入れを進めている。

学位プログラムを通じた外国人研究者の受け入れの取組としては、ヒューマンバイオロジー学位プログラムでは、授業の一環として World Science Seminar を開講し、海外から毎年 20 名程度の研究者を招へい、大学の世界展開力強化事業において、ASEAN 諸国および、韓国、欧州の研究者を招へいしている。

外国人留学生の正規生の数の増加

国費留学生 (*309 名) のほか、国際化拠点整備事業 (グローバル 30) や博士課程教育リーディングプログラムで設置した英語プログラム在籍者 (348 名) をはじめとして本学で学ぶ正規学生は 1,427 名に達する。

日本で就職した外国人学生の数の増加

英語で個別相談に応じるキャリアカウンセラーを配置し、平成 21 年度から留学生の就職相談専門のカウンセラーの配置や留学生対象の就職ガイダンスの開催 (平成 25 年 10 月-12 月に 9 回)、外国人留学生のための起業セミナーの開催 (平成 26 年 3 月開催: 参加企業 28 社、留学生延べ 203 人)、G30 英語コース卒業進路の開拓、企業に英語による採用選考に関するアンケートの実施等を通して、外国人留学生の就職支援を恒常的に行っている。また、学群に入学する全留学生につくばキャリアポートフォリオを配布し、キャリア形成のツールとして活用している。大学院生に対しては、大学院共通科目のキャリアマネジメント科目群を通してキャリア形成を支援するとともに、グローバルリーダーキャリア開発ネットワークを通して長期インターンシップのマッチングも実施している。

チューニングの進捗

チューニングとは、ボローニャ・プロセスに対する欧州の大学による主体的な反応として 2000 年に始まった動きである。抽象性の高いコンピテンス枠組を大学間で共有することで緩やかな「標準性」を実現しながら、各大学がそれぞれのミッション、学生のニーズ、活用できる資源に照らして具体的な学習成果に落とし込んでいくことで大学の「多様性」も保持することを目指すものである。この流れの中で、本学では平成 25 年度より国立大学機能強化事業の支援を受け、本学の将来構想である日本版チューニングの枠組みの構築に向けた調査研究を開始している。うち、ボルドー大学とはジョイント・ディグリー開設に向けたチューニングの準備を進めている。

【本構想における取組】

Campus-in-Campus の設置

上記におけるこれまでの取組を基に、以下の通り開設に向けた準備を進める。

- 1) 第 1 期パートナー大学の本学側オフィスの設置、コーディネーター教職員の相互配置
 - パートナー大学のオフィスはまず本学春日プラザ内に設置し、その後、グローバル・コモنزのオーバーシーズコモنز内に移設
 - H26 年度に UB、UCI、NTU の本学内オフィスを開設、コーディネーター教職員を受け入れ
 - その他の 4 大学 (MJIIIT、LU、UG、EU) の双方のキャンパスにおけるオフィス、コーディネーター教員の配置に関する協議の後、H30 年度までに順次設置する。
- 2) Campus-in-Campus の拡充

上記パートナー大学に加え、ドイツ、ブラジル、イギリス、米国他の大学ともオフィスの相互設置、人員の配置を進め、H31 年度以降毎年 Campus-in-Campus を 1 校ずつ開設し、本事業終了時に 12 校の Campus-in-Campus を実現する。

科目ジュークボックスの学位取得可能なコースの数

1) H28年度までに各パートナー大学と協働し以下のコースを開設する。

UB: フードセキュリティ、神経科学、
UCI: 航空宇宙工学、システムズバイオロジー、
NTU: 農学、生物資源科学、
MJIIT: 国際連携環境バイオ技術

2) H28-31年度に第1期パートナー大学に加え、他のパートナー大学との連携で以下のコースを開設する。(ヘルスイノベーション、クレノバイオメディスイノベーション、ナノサイエンス、体育・スポーツ科学 等)

科目ジュークボックスシステムにおける科目の開設

科目ジュークボックスシステムにおける科目一覧、シラバスの公表、履修登録、eラーニングコンテンツの作成・配信、成績管理システムをH28年度を目途に構築する。

各パートナー大学が科目ジュークボックスシステムに提供・登録する最小限の科目数は5(合同学位プログラムを実施していないアジアの3大学)、10(合同学位プログラムを実施している5大学)、20(英語圏の5大学)科目と想定される。その場合、H35年度までに計165科目以上が海外の大学から提供される。本学からの提供科目(英語で実施)やその他、Campus-in-Campusを持たない協定校からの提供科目を加えると、H35年度には約500科目が提供されると予想される。

登録する科目は、それぞれのパートナー大学との共同研究に関連した分野の大学院専門科目から整備をはじめ、順次拡大する。まず、教員・学生が移動し授業を実施するライブ形式の科目の整備を行い、併せてeラーニングコンテンツの作成を進める。

外国人研究者受け入れ数の増加

Campus-in-Campusは、本学と海外の協定校のキャンパスを丸ごと仮想的に相互にキャンパス内に取り込み、その中で本学と協定校の学生、研究者、職員が活動する研究教育環境を双方向にシームレスに共有し、協働するためのプラットフォームである。これにより、授業、FD、共同研究等の目的でCampus-in-Campus設置校から本学を訪れる研究者の数が飛躍的に増加する仕組みである。

この枠組み下で外国人研究者の受け入れを増加させる以下の具体的施策を行う。

- 海外の研究教育ユニットを招致(計9)し、先方の大学の博士研究員等の交流を進める。
- Campus-in-Campusパートナー大学の研究者に本学および筑波研究学園都市が有する研究ファシリティの利用に関する便宜を図る。
- 2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を踏まえ、各国のスポーツ科学研究者に本学の体育施設の利用を促す。
- 本学独自の「若手研究者中短期海外派遣・招聘プログラム」の枠組みを利用し、国外の若手研究者の招へいを積極的に展開する。
- 本学および筑波研究学園都市における学術集会の主催・招致活動を展開する。

外国人留学生の正規生の数の増加

研究力の飛躍的向上と国際互換性のある学位プログラムへの移行を進めることにより国費留学生の倍増を目指す。これに加え、Campus-in-Campusの仕組みを活かして、学士オールラウンド型学位プログラム(定員10名の約半数が外国人)、国際社会で就業力のある人材育成学士学位プログラム(学士課程、定員50名全員が外国人)、総合理工学(学士課程、定員10名の約半数が外国人)、グローバルイノベーション共同学位(ジョイントディグリー)プログラム(大学院、定員60名の約半数が外国人)等、英語で実施する学位プログラムをさらに増やし、H35年までに倍増を目指す。

日本で就職した外国人学生の数の増加

これまでの支援に加え、国際社会で就業力のある人材育成学士学位プログラムによって、芸術、体育、エイジングケア、特別支援、日本語教育、農業という本学が強みとする分野の専門性と日本国内で就業可能な日本語運用能力と日本社会・文化の深い理解を併せ持つ留学生を育成し、我が国の経済社会の発展を担う人材を輩出する。同プログラムにおいては、日本企業における短期・長期インターンシップをカリキュラムに組み込んでおり、これにより、留学生が日本企業の現場に直接触れ、就職に対する具体的なイメージを持たせるとともに、企業とのつながりを構築する。

チューニングの進捗

H26年度は日本版チューニングの枠組みの構築に向けた本格的な調査研究を続け、H27年度にテストケースとしてグローバル教育院で4分野の学位プログラムについてチューニングを試行する。外部アドバイザー委員会でその検証を行い、チューニング完了後、当該学位プログラムはグローバル教育院で質保証する。H35年度までにチューニング可能なすべての学位プログラムのチューニングを完了する。